

人々のためになるインフラを作りたい



JICA経済基盤開発部
都市・地域開発第一課

小島 海
KOJIMA Umi

大学院卒業後、2007年にJICAに就職。南アジア部、インド事務所、札幌国際センターを経て、2010年5月から現職。

アジアやアフリカなど、開発途上国の都市問題の解決に取り組み、JICA経済基盤開発部の小島海さん。現場を大切にしたい国際協力をモットーに、人々のためのインフラ作りを目指して奮闘している。

中

学生の中から「将来は国際的な仕事ができる」と考えていました。そして私にとってはなぜか自然と「国際的な仕事」が「国際協力」につながっていき、夢をかなえる第一歩として、開発について学べる大学を選んだんです。在学中はNGOの活動やボランティアにも積極的に参加し、いろいろな角度から国際協力を体験しました。そこで分かったのは、当たり前ですが、どこに行ってもみんな同じ、人間、だということ。国も人種も関係なく、人と人として相手と付き合えることができる国際協力を生涯の仕事にしたいという思いが強まってきました。

専門のブータンの開発についてさらに研究するため大学院に進み、JICAが実施するプロジェクトのインターンも経験。その時、JICAに入りたかったのですが、そのきっかけの一つが、日本の支援でブータンに建設された市役所の開所式での日本人専門家の言葉です。「あなたたち自身の手で地方行政をしっかりと進めていくことが、日本国民への感謝を表す一番の方法です」。国境を越えて、人と人をつなぐ仕事に魅力を感じました。

就職後は、本部とインド事務所でのOJT※を経験しました。インドではオフィスでの業務作業からプロジェクトの方向性についての協議まで、さまざまな業務に携わり、国際協力には本当にたくさんの方が関わっていることを知りました。それぞれの立場で主張す

べきことも規則も異なりますが、現場を一番大切にしないと良い協力はできないこと、現場を生かすために自分が存在していることを身をもって感じました。

帰国後は、札幌国際センターでインフラ分野や地域開発の研修事業を担当。北海道は60年にわたり「北海道総合開発計画」を基に開発を展開してきた歴史があり、途上国の研修員が学ぶには格好の土地です。常に、ごまかしの利かない、現場が目の前にある国内機関で、支援する側のリソース、される側のニーズの行き違いに直面しながらも、その間をつなぎ、研修員に役立つ研修になるよう努めました。

そして昨年5月からは、アジアやアフリカの都市・地域開発分野の協力を担当しています。世界では都市化が進んでいますが、特に途上国では、膨れ上がった人口に街の機能が追いついていないのが現状です。そこでJICAは、都市計画のマスタープラン作成から、道路や橋、電気、水道などのインフラ整備まで、都市の将来を見据えながら包括的な支援を展開しています。

例えば、7月に独立した南スーダンでは、2005年の南北包括和平合意成立後、首都ジュバの生活基盤整備のため緊急開発調査を実施しています(14ページに関連記事)。長年の紛争で基礎インフラが崩壊してしまっただこの都市で、何を優先的に進めていかなければならないか、現地のニーズを的確かつ迅速に把握しながら、事業を組み立てていかなければならない点に難しさがあります。でも、道路や港の整備、共同水栓の設置などが進むにつれて人々の生活は目に見えて改善されてきており、基礎インフラの重要性を実感しています。

南スーダンには今、国際社会の支援が一気に入ってきているので、全体的な都市計画の整合性を取りながら、他の援助機関との協調を効果的に図る必要があります。また、政府の機能が脆弱な中で、どのように現地の人材を育成していくのかもカギとなっていくと思います。

日本も戦後に急速な都市化を経験し、試行錯誤しながら都市開発を進めてきました。私たちJICA職員は、そんな日本が誇る経験や技術に付加価値を付けて、途上国支援に生かしていくこと。最終的に、何が途上国のためになるのか。常にそれを意識し、迷った時は現場に立ち返って答えを探していきたい。これからも、本当に人々のためになるインフラが作れるよう努力していきたいと思っています。



現在の部署で担当しているスリランカで復興支援のためのインフラ整備プロジェクトについて先方政府と協議する小島さん(左から2人目)

JICAと札幌市水道局が協働で行う研修「水道技術者」コースに同行する小島さん(中央)

※On the Job Trainingの略。JICA職員は1年目に海外事務所へ8カ月(当時)赴任し、国際協力の現場の実務を徹底的に学ぶ。